

地域の6次産業を育てる!

第6回

肥後銀行

「玄米ペーパーストパン製造販売事業」支援の取組み

独自製法を用いた玄米パンの 商品開発・事業化をサポート

地産外消も視野に冷凍玄米ペーパーストの販売支援も展開

稲 の果実である籾から籾殻だけをを取り除いた「玄米」。ビタミン、ミネラル、食物繊維が豊富で、完全栄養食といわれるほど栄養バランスも良い。ただし、「硬くて消化が悪い」「精米のよくなもちもち感がない」などの理由から、食べにくいと感じる人が多いのも事実だろう。

今回、紹介する「熊本玄米研究所」は、玄米ペーパースト製法という独自の製パン技術を用いて、リーズナブルで食べやすい玄米パンの製造に成功。同研究所は玄米パン工房「コメノパンヤ玄米家」を6月16日にオープンし、玄米パンの専門店として製造販売を始めた。消費者の健康志向の高まりも手伝

って、毎日、店頭は多くの買物客で賑わう。地元各メディアにも数多く取り上げられており、「行列のできるパン屋さん」として今注目の6次産業化事業者である。

熊本玄米研究所の玄米ペーパーストパン製造販売事業は、農林漁業成長産業化支援機構（以下「支援機構」）の出資同意案件。出資母体

となったのは農業機械販売を行う地場大手の中九州クボタで、ここに「肥後6次産業化ファンド」が共同出資を行った。

以下では、肥後銀行のアグリビジネスに対する支援体制やこれまでの主な取組みを見たとうえで、熊本玄米研究所に対する支援内容についてレポートする。

肥後銀行が本部を置く熊本県は三方を山に囲まれ、平野部から山間部まで有している。変化に富んだ地形や気候に加え、阿蘇からの



伏流水など水資源にも恵まれており、多彩な農業が可能な地域だ。平成24年の農業産出額は324.5億円で全国第5位。トマトやスイカなど5品目で生産量第1位を誇るほか、全国上位の生産量の品目が数々ある。全国ブランドとなっている「あか牛」をはじめとした肉用牛の生産や酪農も非常に盛んである。

事業開発推進グループが総合的な支援を展開

熊本県がまとめた平成25年の農業産出額（推計値）は前年比1%増の3280億円で、4年連続の増加となったもよう。ただ、産出額ピークの平成2年の4016億円からは、2割程度の減少となっている。その背景をみると、日本有数の農業県である熊本県においても、農家戸数や耕作面積の縮小、農業従事者の高齢化、農畜産物の価格低迷などの課題が横たわっているようだ。

「私どもでは農業を熊本県の基幹産業と位置付け、積極的にご支援させていただきます。産業構

造や人口動態を考えた場合、農業を軸にして、2次3次産業との産業連関の中で付加価値を上げていくことが地域の活性化につながる、と考えています。そのためには、当行がハブになってお取引先のコーディネート役として機能することが大切。それが結果的に地域の6次産業化につながるのではないのでしょうか。地方銀行が持つネットワークを最大限に生かして、地域の様々なお客様との縁を大切にしながら、付加価値を上げていくお手伝いをさせていただければと思います。」

こう話すのは肥後銀行本部でソリューション営業を担当する事業開発部事業開発推進グループの那須弘生グループ長だ。

肥後銀行では、医療・福祉、観光、自動車・半導体、不動産とともに、農業をソリューション営業の重点分野としている。事業開発推進グループでは、それぞれの分野に担当者を置いていますが、農業の担当者は3名、うち1名は県の農林水産部のOBだ。

3名の農業担当者は資金調達

支援以外にも、異業種から農業への参入方法・手続き、事業計画の策定、販路開拓・拡大等について総合的な支援を展開している。

熊本県は異業種からの農業参入も非常に盛んな地域。県も積極的に参入支援を行い、耕作放棄地の解消や雇用拡大に努めている。企業等の農業参入は平成21年度の農地法改正により容易になったが、熊本県では平成25年度末までの5年間の累計で98件が農業参入。そのうち約60件が肥後銀行が参入支援に携わった案件になっていることから、同行の力の入れようが見て取れる。

「農業が成長分野として注目されていることもあり、熊本県でも企業等の農業への参入は活発になってきています。県も補助金を用意したり、農業参入セミナー・講座を開催したりと参入支援の施策が充実していますので、ご関心のあられるお取引先には積極的に情報提供を行い、参入方法や手続き面のご支援をさせていただきます。農業への新規参入ということになれば、運転資金や農業機械購入の